

御殿場・小山の化石湖と岩屑なだれ：
11年東部支部夏季巡検会報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 朗三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024708

御殿場・小山の化石湖と岩屑なだれ

—11年東部支部夏季巡検会報告—

齋 藤 朗 三

1. はじめに

2011年8月21日(日),「連絡が来ないけれども,この雨の中,本当にやるのかな.」という不安を抱えながら8時00分頃,十里木を越え,御殿場に向かっていった.8時30分頃,集合場所の御殿場市役所駐車場に着いた.その後,増島支部長も到着.支部長の話では,「少しぐらいの雨ならば決行.」そして,「地方新聞にも掲載してもらったので,最終参加人数は講師の保坂貞治会員を入れて17人(会員:10名,一般参加:7名)となった.」とのことであった.私は調査等で歩いているのが富士山の南西山麓なので,この日の富士山東山麓巡検を大変楽しみにしていた.9時00分には参加者全員が集合し,雨の中巡検がスタート.道案内役として参加者の中から地元の方が各車に乗ったことで,迷う車もなく,大変スムーズに巡検を行うことができた.

この日は,富士山東麓における古富士火山起源の泥流堆積物を主な原因とする四つの化石湖,そして,2,900 cal BP(宮地,2007)に起きた御殿場岩屑なだれ起源の流れ山を見学することができた.この巡検会の報告を見学順に沿って行いたい(図1).

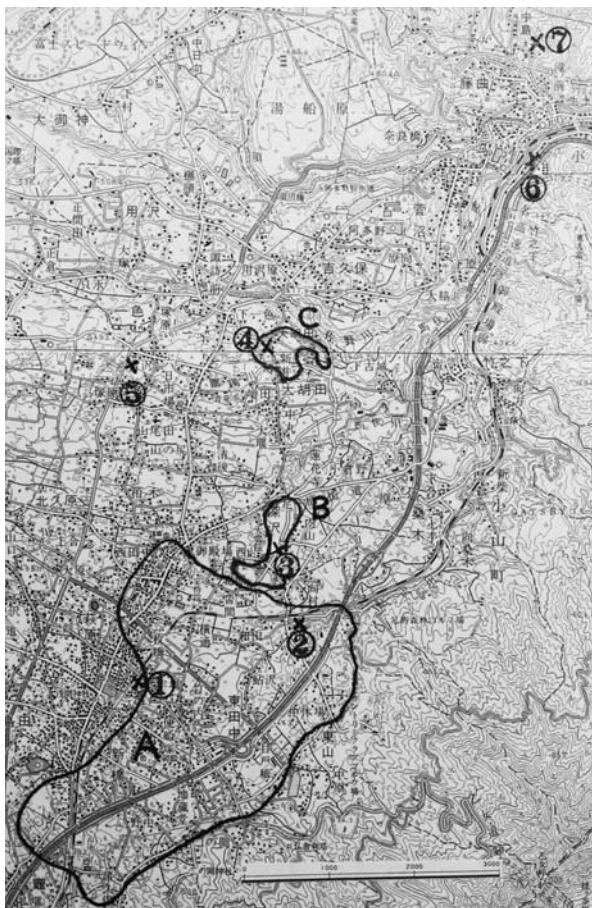


図1. 観察ポイントと3つの化石湖
5万分の1「御殿場」「山中湖」を縮小.

2. 巡検ポイント

(1) 新橋東公民館(流れ山及び古御殿場湖):

流れ山: 新橋東公民館の北側に高さ5 m位の小山がある. この小山は2,900 cal BPの富士山の御殿場岩屑なだれによるもので, 富士山の大爆発で火口周辺の溶岩や火山砂礫, 火山灰等の火山碎屑物と共に山体が崩壊して飛散し, 高温の状態で山の斜面を地上を這う様に飛散した. 速いところで80

富士市立少年自然の家

m / 秒以上で走ったという。飛散塊は碎屑物の一部をまき散らし、勢いが弱まると地上に落下して小山を作った。この小山が流れ山である。一般に高さは5 m 前後とのことである。御殿場・小山地区の多くの神社は流れ山の上に立っている。地元の人は塚といい、地名にもなっている。塚原、塚本等である。御殿場駅に近いところはほとんどが切り崩して宅地化された。今でも流れ山のあったところでは、溶岩の破片や赤く焼けた溶岩片が敷地内に見られるとのこと。説明後、足下を見ると敷地内に赤く焼けた堆積物や玄武岩の岩塊が見られ、この小山が流れ山であることが分かった。私にとって初めて見る流れ山であった。意外に小さく可愛らしい小山だったのには驚いた(図2)。



図2. 新橋東公民館の「流れ山」

古御殿場湖 (A) : 東公民館の正門を出て、周りの平坦面を見ながら説明を受けた。このあたりで土木工事をすると地下に湖成堆積物のシルト層があり、その層の中から海草のようなひょろひょろのヨシが出てくる。この化石湖に興味を持ち、湖の周りには古墳があるだろうと考え、調査を開始した。ほぼ御殿場インターを中心に、長径が北東－南西方向で、約5 km。短径が北西－南東方向で、箱根に向かって約3 km。深い所で20 m 位である。御殿場南小学校は東半分が湖成堆積物の上に建設された為、地盤沈下と歪みによる亀裂を生じ、築後26年で改築せざるをえなかったとのことである。

また、地名にも便船塚(船に乗った場所)、二の岡(岡は船着場、以前は三の岡、四の岡という地名があった)が残っている。この化石湖ができたのは、古富士火山の活動末期に、泥流堆積物が鮎沢川を堰き止め、古御殿場湖を生み出したと考えられる。この泥流堆積物は乾くと固くて非常に緻密である。時代は泥流堆積物中の木片の ^{14}C 年代測定で約2.4万年前(津屋, 1971)と推定されている。また、御殿場岩屑なだれも古御殿場湖を直接埋積せず、むしろ自然堤防として化石湖の延命に関わった。昭和30年代まで永原地区には湿地が残り、ヨシが群生していた。二の岡に向かう道路沿いにも沼地の名残が見られ、完全に化石化したのは20年位前である。大きさは、山中湖の約1.7倍であったとのこと。しかし、現在、周りを眺めても古御殿場湖を想像するのはなかなか難しかった。

(2) 暢気父橋 (のんとぼし) (古富士泥流堆積物) : 深沢地区に流れてきた古富士泥流が鮎沢川を埋め、酒匂川へと流下した。化石湖の北東縁を作っている泥流堆積物の崖を暢気父橋付近から見学。約10 m 位であろうか。御殿場アウトレット付近では川沿いに30 m 位の層厚で露出しているとのことである。崖が右岸のため、対岸からしか見学できず、中に埋まっている1 m を超える亜角礫が見えるが、近寄れないので、固さ等を確認できないので残念であった。紅葉橋の上流にある(図3)。



図3. 暢気父橋から見える古富士泥流堆積物の崖

(3) 深沢地区大雲院北東 (古深沢湖 (B)) : 周り

には水田が広がっていた。その水田の部分が古深沢湖である。周囲に高まりがあり、湖の縁が分かる。何軒かの家が建っていた。古深沢湖は思ったほど小さくなく、約 21 ha で、古御殿場湖の約 50 分の 1 弱である。長径はほぼ南北で 1 km 強。短径は 150 m ~ 500 m 位、米がよく育ち、新潟コシヒカリに負けないくらい大変おいしいとのことである。関東大震災の折りに大災害を受けたという話を聞いたのが調査のきっかけだったそうである。古老や農家を訪ね、湿地の範囲を特定していった。耕耘機が沈み、ユンボでやっと引き揚げたという話もあったとのことである。また、屋号が「ママの上」(「急な崖の上」という意味)という家があり、湖岸に建ち、急斜面であったことがわかる。

約 16,500 年前の古富士泥流が湖の西縁で弱まり、南縁から鮎沢川沿いに北東に向かい取り囲むように流れた。その窪地にできた水たまりが最初とのことである。その後、御殿場岩屑なだれが北面を塞いで、本格的な古深沢湖が生成された(図 4)。



図 4. 古深沢湖の高くなっている縁(林の所)

(4) 大胡田地区(古大胡田湖(C))：古深沢湖の北縁より 1.5 km 北へ行くと、古大胡田湖の南縁につく、ほぼ楕円から南縁の西光寺周辺を除いた形をしている。この水田地帯には「ごてんぼこしひかりの里」という大きな看板があった。成因は古深沢湖と同じで、古富士泥流の流れた窪地に水がたまりが形成された。しかし、周囲の高まりは、古深沢湖に比べるとわかりずらかった。造成され、原地形が分かりずらくなっているためであると思われる。大きさは 13.7 ha で古深沢湖より小さい。古老の話では大胡田の胡は昔は湖と書いたとのことである。

(5) 国道 246 号信号機「古沢」南側の小山(流れ山)：「古沢」の信号機から南へ国道 246 号沿いに 300 m 位行った東側に小山があった。「これぞ、流れ山!」という感じで、お椀をひっくり返したような形をしていた。高さは 5 m 位で新橋東公民館のものと同じ規模のものであった。富士山の火口より 17~8 km 離れているが、岩屑なだれ発生の際に一つのブロックになって走ってきたとのことである。この流れ山には、パズル状に砕けていた溶岩塊が観察できたとのこと。残念ながら、削られ、現在は見られなくなった。また、堆積物の観察できる場所がなく、わずかに玄武岩の岩片を見つけることができただけである(図 5)。



図 5. 古沢の「流れ山」

(6) 小山町犬ノ平の崖(古富士泥流堆積物)：(2)と同じ時代の古富士の泥流堆積物でできている小山町犬ノ平の崖に向かった。国道が混雑していたので、地元の方のナビで細い道を通ってやっとたどり着いた。ここで、ようやく身近で観察することができた。見上げるとオーバーハングで切りだった 10 m 以上の崖の大露頭が目の前に広がり感激。階段があり、上って行くと上の道路まで行ける。この露頭が、ハンマーが歯が立たないほど固い。乾燥することでこれほど固くなるとは!!。高密度流

なので1 m位の礫も簡単に運んでしまうとのこと。礫は角～亜角礫で、確かに大きい礫は径が1 mを超えている。マトリックスが白っぽく見えたので、これは何だろうと思って、ハンマーでたたいたら、白っぽいのは表面だけで中の方は変質して汚れた黄土色になっている火山灰や火山砂だった。やはり古富士泥流堆積物であった。それにしても固い。自分の住んでいる富士山南西で観察できる古富士泥流とは堅さがまるで違う。こんな古富士泥流もあるのか！と、一人で感激していた。礫は数個割ってみたが、みんな玄武岩であった(図6)。



図6. 犬ノ平の崖(古富士泥流堆積物)

(7) 金時公園(古小山湖)：最後に見学したのが、古小山湖によりできたと思われる水つきの堆積物(水成のテフラ層)であった。案内された場所は公園から少し登った斜面状にある露頭であった。高さ7~8 mの露頭で、ほぼ水平の何枚かの層に分かれているのがよく分かる。古小山湖の大きさや成因等については、「静岡地学104号(2011.11)」に発表するとのこと(保坂, 2011)。ぜひ、その論文をお読みください。この公園は坂田金時(幼名「金太郎」)が生まれた場所とのこと、実際に来たのは初めてであった。金太郎のまさかりが飾ってあり、大きさにびっくり!(図7)。



図7. 金太郎のまさかり

3. 終わりに

雨の中での巡検。それでも、手を抜くことなく露頭で一つ一つの事象を丁寧に説明してくださった保坂講師に感謝。ほけ防止に調査をしている等という謙虚な言葉を聞きながら、地道に郷土の地形地質を調査していくことが、魅力あるテーマの発見に繋がるのだということを実感した。自分の住んでいる足下に興味関心を持って調査することが大切である。という言葉を自戒として、これからフィールドを歩きたい。

引用文献

- 保坂貞治(1998): 富士山東麓の地形・地質(その4)―御殿場の化石湖―. 静岡地学, 78, 33-36.
保坂貞治(2004): 古大胡田湖と古深沢湖. 静岡地学, 90, 51-54.
保坂貞治(2011): 古小山湖. 静岡地学, 104, 1-8.
宮地直道(2007): 過去1万1,000年間の富士火山の噴火史と噴出率, 噴火規模の推移. 日本火山学会編, 富士火山, 79-95, 山梨県環境研究所.